

緑のまきば

1969, No. 1
No. 4

小金井緑町教会
小金井市緑町四丁目6
電話042-311-7926
編集人 山本圭一

所有からの自由

—マルコ福音書12章41-44—

山本圭一

エルサレムの宮のうちに婦人の庭といわれる場所があり、主イエスの説教に耳を傾けていた多くの人々も、そこにやってくる金とさいせん箱に投げいられて、当時、金持ちが多くのものを献げ、貧しいものが少ししか献げ得なかつたのも、止むを得ないことであったらしい。それらの人々にまじって、貧しいやものな、人目をはばかるようにおそれるおそれる連み出て、レスタニフを献げた、ローマ貨幣で最小の「コドラント」に過ぎなかつた。

しかし、この事件において何が最も重要なのだろうか。見落してならないものが二つある。それは、この事件がイエスの説教を聞いたあと、そこにいあわせに弟子たちに限定して語られたこと、そしてこの出来事を、坐して休息のためではない、神の権威の座に坐して、改めて「凜然」と眺めていたのではない「おられた方か、そこにいました」ということである。貧しいやもの行為は、審判者イエスの透徹した眼と、イエスによって呼び寄せられた弟子たちの中でしか意味を持つたに過ぎない。この根本状況より切り離してやものの行為を考へることは、ナンセ

ンスである。こうした抽象的な理解なく、この女の行為をのび美化した人道主義的な解釈と生か、このテキストをなんとなんと真力にし、多くの誤解を与えてきたことだろうか。

われわれは、今、説教を聞き、なんとなんとなく献げ、感謝し、祈、ているかもしれない。そこで、うわべを飾ることは、人の前では可能なことだ。いや、多くの場合、自分なりに敬虔にふるまい、人間としての誠実さをつくそうとするだろう。時にあり金をはたく思ひまりの良さは、狂信者の中にすらあり得ることだ。しかし、ある時はなんとなんとなく凜然としており、ある時は思ひつめているわれわれの行為の状況は、いつも大きい振幅を持つている。だから、思いつめた状況だけを美化することは、人間の現実にあわなないばかりか、まらかないのである。しかし、人間の明暗のゆれが出つたところを、まはまざまざと見つめていたともう、何と驚くべきリアリズム、人生はそこで一瞬にして深いおそれに出会う、使徒行伝5章のはじめに、アナニヤとサツピラの記事がある。彼らは自分の財産を処分し、生活の資をそこなら差し引いた上、残

りを全部だといつわって教会に持つてきた。しかし、彼らほどもに、たちまち死んだという、初代教会の人々は献げものを主が見ていたもうことごと、アナニヤ・サツピラの偽りの献げものの記事を一連のものとして理解してしたのである。このテキスト主題は、レスタニフを献げた人間の行為ではない、
「献げものをした人間を、じつと見つめる主の眼目である」。

「めんどの否はありあまる中から投げ入れたら、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」。

貪しい女を心にかけて捨つまな、ともにいたもつて、この行為を聖別し彼女が全存在を受け入れ給うたこと、このことが偉大であるのだ。イエス・キリストがいたもつたらこそ、われわれの一切の所有をたとひ投げ出してもそれが意味を持つのだ。まは決して自分の生活をいためつけることを喜びたまわぬ。だから、自己犠牲の大きさに満足してはならぬ。なにゆえなら、神は要求する前に、独り子を与え給うた。人間と歴史にとつてのすべては、神から与えられた。われわれが何かを所有したのではない、われわれが神のものとなった。神の所有となった。弟子たちの集団のうちに、明らかにされねばならないのは、この信仰の秘義であった。だから、最後に問われていることかある。人生は、さまざまに富を獲得することなのか、否、差し出すことが主の前では、最大の富なのだ。教会が今、世俗の中で知ったことはこの逆説と、それにふさわしい自由だけだ。